

ペロ活～舐められて、乱されて～

ショートストーリー 京の過去と未来

## 本編トラック3の直後

言つたでしょ。だからだよ」

妹には悟らせないように、何気なさを装つて言う。

「ふーん、そういうことかー。まあ、だからこの力

「お兄ちゃん、今日、機嫌良くない？」

目の前でパフェを頬張っていた妹が突然そんなことを言つた。視線を落としていたスマホから顔を上げ、表示していたメッセージアプリをとっさにオ

フにする。

「はっ、俺が？……なんで？」

「んー、さつきから鼻歌うたつてるし、それに口元

が緩んでる氣もする。なんかいいことでもあつた？」

そう言われ、つい先ほどまで一緒にホテルにいた

お姉さんの顔が思い浮かんだ。

「いや、別に何も……あつ、臨時収入があつたつて

「それより、学校案内もらつてきたんでしょ？ 早

「どう、美味しい？」

「つ……うん、たしかに美味しいかも」

少し酸味のある苺と生クリームの甘さがちよう

ど良くて、女子高生たちが騒ぐ気持ちもわかるような気がした。

く見せて」

「う、うん……」

妹が隣の椅子に置いていたバッグからのろのろとパンフレットを取り出した。渡された冊子に目を通してみると、前方から心配そうな視線を感じる。

「入学金が20万、授業料が55万、その他の費用が70万か……」

「うん……他に、教材費とか調理器具の費用とかもあるんだよね。あと実は海外研修に行く費用も積み立てておかないといけなくて……」

「そつか……」

(はあ、やっぱそれなりにするよな)

そう考えているのが妹にも伝わったのか、

「ねえ、お兄ちゃん。やっぱり私も高校出たら働く

「……ありがとう、お兄ちゃん」

よ……それで稼いでちやんと自分のお金で……」

「そんなこと考えなくていいよ……その話は何度

もしたでしょ。進学にかかる費用は全部兄ちやんが出すつて——それでパーティシエになつて美味しいケーキ作ってくれるつて言つてたじやん。俺、それ楽しみにしてるんだけど」

「つ、だけどさ……」

「あー、あとカステラも作つてよ。母さんが誕生日ケーキ代わりによく作つてくれてたヤツ」

「……カステラだつたら、すでに作れるよ。お兄ちゃんの好物なんだから……でも、わかつた。早く夢

叶えて、お兄ちゃんにたくさん作つてあげる

「うん、俺が飽きるまで作つてよ」

ペロ活～舐められて、乱されて～  
ショートストーリー 京の過去と未来

「いいから、それ食べて、早く帰るよ」

「うん……パフェ美味しいね」

妹の頭を軽く小突いて、それからは勢いよくパフェが口の中におさまっていくのを眺めながら、頭の中でお金の算段に思いを巡らせていた。

父親がいて母親がいて妹がいて仲の良い家族だと思っていた。それが全て崩れ去ったのは、中学に上がつたばかりの頃で、突然父親が家を出て帰つてこなくなつた。

「ほかに女ができる出て行つたのよ」

母親が妹である叔母さんとそう話しているのをこつそり聞いてしまい、子どもながらに父親はもう帰つてこないんだろうとわかつた。

それからは3人で暮らし、母親が一人で俺たち兄妹を育てくれた。父親がいなくとも、裕福でなくとも、幸せで温かい家族にしようと、それぞれが努力をしていたし、少なくとも俺はそうしているつもりだった。だけど、俺が中学3年の時、今度は母親が家を出て行つた。俺たち一人を置いて――……。

今になつて思い返すと、あの頃の母親は宙を見てボーッとする時間が多く、話しかけても聞いているのかわからないような状態だった。

（大変な思いをしたし、何もかもリセツトしたい気持ちだつたのかもしれないね）

そう思うと母親を恨む気持ちにはならなかつた。それよりも泣きじやくる妹を抱きしめ、これからは俺が守つていくんだと誓い、そのことで頭がいつぱ

いだつた。

一人きりになつた俺たち兄妹を引き取つてくれ

たのは叔母さん一家で、急に厄介者が増えたのにも  
関わらず不自由のない生活を送らせてくれた。それ

で高校にも通わせてもらい卒業もできだし、叔父も  
叔母も俺が希望するなら大学に行く費用も捻出し  
てくれると言つていたけれど、そこまでお世話にな  
るわけにはいかない。一人は本当によくしてくれた  
し、本当の家族と思つてくれていいと言われていた。

(とは言つても、学費と二人分の生活費か……現実  
はなかなか厳しいんだよね)

叔母さんの家に帰る妹と別れてからも、今後どう  
するか悩みは尽きなかつた。けれど妹の夢は絶対に  
叶えさせてやりたい——それを思えば自分を犠牲  
にすることすらいとわなかつた。

すぐ感謝をしているけれど、やつぱり甘え続ける

◇ ◇ ◇ ◇

ことはできないと、俺は高校を卒業すると同時に家  
を出て一人暮らしを始めた。今はまだ妹だけは叔母  
の家に住まわせもらつてゐるけど、パティシエに

「京くん、お願ひ！ モデル……やつてくれない？」

仕事で忙しかつたお姉さんに急に呼び出され、久

なるために専門学校に通いたいという妹の進学費

用、それだけではなくこれから的生活費もできるだけ

自分で工面したくてお金を探めている。

ペロ活～舐められて、乱されて～  
ショートストーリー 京の過去と未来

しぶりに会うなりそんなことを言われた。

「えつ、俺がモデル？ お姉さん、何言つてんの？」

「はつ？ えつ？ なんで俺が……」

「俺、身長170センチしかないんだよ。モデルとか無理でしょ」

「モデルって言つてもファッショニの方じやなくて、お願ひしたいのはマイクモデルなんだ」

「それで……俺？」

「えつ、マイクってことは、お姉さんの会社のつてこと？」

お姉さんに呼び出されたオフィスに化粧品のボスターが貼られていたことや商品の箱がたくさんあつたのを思い出す。

「うん、そう」

「へえ……マイクモデルって……それつてメンズ化粧品かなんか？」

「ううん、それが女性向けなんだけど……」

「ううん、それが女性向けなんだけど……」

「実は新しいブランドを立ち上げて、モデルさんも決まっていたんだけど、急にNGくらつちやつて……イチから探さなきやいけなくなつたの」

「うん。そのブランドのモデルがね、透明感があつて、瞳のきれいな子つていうイメージなの。それですぐに京くんが思い浮かんで……」

「つ……透明感があつて、瞳がきれいつて……なにそれ」

急に思つてもないことを言われ、驚く俺とは反対にお姉さんはあつけらかんとしている。

「ふふつ、私は京くんしか思いつかなかつたよ。だか

ら、どうかな？ やってみない？」

「んー、でも、俺たぶんモデルとかできないよ。そんな経験ないし、できる気がしない」

「私はそんなことないと思うよ。京くんならできるよ。それに……モデル代、けつこう出せると思うんだ」

「モデル代？」

それを聞いて、つい反応してしまう。

「うん、大きなプロジェクトだし、これは正式なお

仕事の依頼だから、報酬たくさん出せるよ」

「報酬、もらえるんだ……っ、でも、だからと言つ

てできる気はしないんだけど」

「それなら、まずはカメラの写りとかテストだけで

も受けてみて、それから決めたらどうかな」

「うん……それなら、受けるだけ受けてみようかな」

「よかったです！ それじゃあ、さっそく日取り組んだら連絡するね」

妙に浮かれているお姉さんを見ながら、不安な気持ちがこみ上げてため息が漏れた。

◇ ◇ ◇ ◇

「あっ、見て。また大きな京くんだよ」

お姉さんが指さす先に、唇の横に真っ赤な口紅のキスマーケをつけてリップを片手に持つ大きな自分がいた。

『惹きつける赤』

ポスターに書かれた文字を目で追い、気恥ずかし

い気持ちがこみあげてくる。

だけど

「京くん、ここに立つて」

「えつ、何、急に……えつと、ここ?」

「そう、それで……はい、これ持つて」

そう言つて渡されたのは、ポスターの中の俺が持

つているのと同じリップだつた。

「ほら、同じ角度で持つて。京くんとデカ京くんの

2ショット撮るから

「えつ、ちょっと……なにそれ」

「ほーら、リップもつと右に傾けて……もう少しだ  
よー」

「つ、ふつ……それ撮影の時、何十回も言われた。

あと『もつと全てを知つているような目で、こっち

を見て』って……あれ、未だに意味がわかんないん

から

「ふふっ、でもよく撮れてるよ。とてもいい撮影だ

った。京くんのおかげで商品の売れ行きも好調だし  
ね——あ、いいよ、そんな感じ。そのまでいて……  
……撮るよ」

カシヤカシヤとお姉さんがスマホで何枚か撮影

をし、

「うん、やっぱりモデルがいいよね。これ、京くん

とのメッセージ画面の背景に設定しようかな」

そんなことを言いながらはしゃいでいる。

「つ……ねえ、今度はお姉さんが、ここに立つて。

それでこれ持つて

「えつ、いや、私はいいよ。こういうの向いてない

リップを受け取ったものの恥ずかしいのか、一向にポーズを取ってくれない。

「そんなことないよ。お姉さんは可愛いし、すぐくきれい。ねつ、だからお願ひ」

ね

日頃、お姉さんが「京くんのこの表情には弱い」

と言つてゐる顔をわざと作つてお願いすると、

「つ……じやあ、一枚だけね——こう?」

照れながらもポーズを取るお姉さんが可愛くて

胸が騒いだ。

「うん、一枚で充分……ほら、もつとリップ、右に傾けてよ。ふふつ、最高の一枚撮るんだから」

「設定完了」

公園のベンチに座り、スマホに表示されている大

きな自分とお姉さんの2ショットを見て思わずにはまりと笑ってしまう。

「つ、それ……なんか恥ずかしいな。すぐに変えて

「えー、そんなに照れなくともいいのに」

飽きもせずに眺めていると、頬にお姉さんの指が

そつと触れた。

「京くんって、本当にきれいだね。肌だけじゃなく

て、全部——あのさ、さつき言つてた売れ行き好調

い合わせもたくさんきてて話題になつてるし

「あー、うん……妹からSNS見せられたよ。『お

兄ちゃん、すごいね』って言われた」

「妹さん、高校生だったよね？ もし興味あればウ

ペロ活～舐められて、乱されて～  
ショートストーリー 京の過去と未来

チのブランドの商品使ってみてほしいな。今度渡してもらえる?」

「うん、専属契約の話も出てるんだ」

「つ、本当に!? うん、妹すつごい喜ぶと思う。

「つ、専属契約……つて何?」

興味はあるだろうけど、そういうの買う余裕ないから

「京くんって、妹さん思いで優しいね……あ、優し

いのは前から知つてたけど

ふんわりと柔らかく笑うお姉さんがきれいで見惚れないと、それが急に真面目な顔つきに変わった。

「あのね、ブランドのチーフディレクター、撮影の

「そうだし」

時に会つたの覚えてるよね? チーフが『また京く

んにモデルをお願いしたい』って言つてたの

「えつ、また?」

突然の話に、全くついていけないとお姉さんはしつかりと目を合わせ、俺の両手を握つた。

「うん、それにね、ブランドのイメージモデルとし

て専属契約の話も出てるんだ」

「つ、専属契約……つて何?」

た撮影があつたり、その商品のPRイベントにも出てもらつたり、あとはウチの会社、定期的にマイク

講習会を開いてるから、そこに出席してもらいたい

し、モデルつて言つても、けつこうやることがいっぱいあるんだよね——あ、それに京くんをモデルに起用したことで、メンズ化粧品の話も本格的に進みた。

「へえ、そなんだ……」

突然の話に、全くついていけないとお姉さ

「これはまだ仮の話だから、しっかりと詰めていく

つぱなしだったけど……」

のはこれからになるけど、もし本当にそうなった場合……あの仕事はもうやめないと——でもそれ以上に安定した収入は得られるから」

そう言われ、ハツとした。

「っていうか、俺がイメージモデルになるってリスク

キーなんじやないの？ 俺と専属契約とか、絶対に

やめた方がよくない？」

「それは大丈夫。会社も私も京くんのこと守るから」

「守るって……なんか俺、お姉さんに守られるの、

かつこ悪い……」

「かつこ悪くなんかないよ。京くんはこれまで妹さんのために頑張ってきたんだから」

「んっ、実際は叔父さんと叔母さんのお世話になり

「妹さん思いで優しい京くんだから、自分のことはいいって全部妹さんを優先してきたよね。でもね、

京くんだって、まだ19歳なんだよ。まだまだたくさん

さんの可能性を秘めてるのに、『自分なんか』って、

諦めてほしくないし、捨ててほしくないの……つ、

これは私の勝手な希望だけさ」

握られた手からお姉さんの体温が伝わってきて、

とても優しい温度に泣きそうになる。

「つ……ありがとう、そこまで考えててくれて。俺、

自分のことを考えるのに慣れてないから、まだよく

わからないけど……でも、ちゃんと考えて考えて、それで答えを出したい。それまで待つててもらえ

る？」

「もちろん。これからどうしたいかたくさん考えて、

う資格がないのもわかっている。

京くんがどうしたいか決めたら教えて」

（でも、いつか必ず……そのために自分がすべき）

「うん、本当にありがとう」

とをちゃんと考えていかないと……）

（俺がどうしたいか……今まで妹を守るってことしか考えてなかつたけど

妹の他に守りたい存在が増えたことを感じながら、小さな手をもう一度しつかりと握った――――。

目を上げると、お姉さんが優しく微笑んでいる。

思わず繋がれていた手を握り返すと、初めて会った日に繋いだ時よりも温かく感じるけど、やつぱり小さくて華奢な手だった。

おわり

（この人を守りたい）

素直にそう心に思い浮かんだ。

（お姉さんは特別で大切な人――――たぶん俺、この人のことが好きなんだ）

でも、今ままじや守れないし、こんなことを言